

## 論 文

## 労働者階級の窮乏化について

三 谷 友 吉

## I

マルクスは『資本論』第1部第7篇第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」において「労働者階級の運命」について論じているが、いまでも、それを労働者階級の窮乏化を意味するものとみなし、そしてこれをもって実質賃金がますます低下することにほかならないとする旧い解釈が、あとをたたない。たとえばウルフソンはかれの新しい著書のなかでマルクスの「資本主義的蓄積の絶対的、一般的法則」を引用してこう論じている。「マルクスは、(有名な引用文のなかで)、技術的および周期的失業のせいで労働者階級は窮乏化にくるしむであろうという確信を表明することによって、生存費理論を事実上修正している。長期的には賃金は生物学的な最低限にますます近づいていくであろう。この所説はいろいろの限定条件で逃げ道をつくってあるが、労働者の生活水準の低下こそは、マルクスが資本主義発展の本質をあらわすものと感じていたところのものであったということは、ほとんどうたがいないようにおもわれる。」<sup>1)</sup>

しかしこういう解釈の当否をあらためてせんさくする必要はないであろう。それでわれわれはいくらか新しい解釈にもとづいているミークの論文「マルクスの『窮乏化説』」をとりあげ、当面の問題にかんする予備的考察としてこれを検討しようとおもうが、ここでまずその主要な内容についてみておくこととしよう。

ミークは、『資本論』第1部第7篇第23章のなかの「資本主義的蓄積の絶対

的、一般的法則」をしめす文章と、それにつづく「自分の生産物を資本として生産する階級の側での、貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗野および道徳的墮落の蓄積」という語句でおわる文章と、第24章の末尾における「収奪者たちが収奪される」という結語をもつ有名な文章を引用したのちに、それらを手がかりとしてマルクスの「窮乏化説」の研究をはじめているが、さいしょにかれは実質賃金の高さの問題と「生存費」の大きさの問題にかんれんしてマルクスの見解を吟味するのである。

まず実質賃金の高さの問題について。マルクスが資本主義的蓄積にかんする諸叙述のなかで一般的賃金水準の高さの問題にほとんど直接に言及していないことに気づいて、若干の注解者は「一般的賃金水準についてはどんな予言もほめかされていない」などといいだした、とミークはいう。そしてそういった見方にいちおう賛同したうえでかれはさらにこう書いている。「しかしながら、係争問題は、マルクスが一般的な実質賃金の顕著な上昇がおこるであろうことをじっさいに予期していたかどうかである。かれの賃金理論が古い『賃金鉄則』よりもはるかに柔軟なものであることは真実である。また、かれの経済学上の諸著述のなかには、——少なくともかれの完成期の諸著述のなかには、——1人あたり実質賃金が長期的な低下傾向をしめすであろうという信念についての証拠は絶対がないということも真実である。しかしながら、実質賃金の顕著な上昇——たとえば、かれの時代このかた先進資本主義諸国においてじっさいにおこったところのものぐらいの——がおこるであろうことをかれが予期していなかったことは、かなり明白であるとおもわれる。」<sup>2)</sup>

そしてそういう賃金の上昇をマルクスが予想しなかったことの証拠についてミークはつぎのように論じている。「賃金にかんするマルクスのほとんどすべての議論において主として強調されているのはこういう事実である。すなわち、資本家と労働者との交渉の過程においては、サイコロはけっきょく労働者にとって不利となるように鉛で重くされているという事実、これである。発展のつづくあいだ資本の構成が同一にとどまっていた、しかも蓄積が急速である

ならば、労働にたいする需要は蓄積とおなじ速さで増加し、そして賃金はおそらくじっさいに上昇するであろう。しかし、こういう例外的に有利な条件のもとでさえも、賃金の上昇によって利得の刺激がにぶくなるような時期が到来するであろう。そこで蓄積率が緩慢となり賃金はふたたび低下するであろう。そしてもちろんマルクスの見解では発展のつづくあいだ資本の構成は同一にとどまっていないうことが重要な点である。われわれのみたように、労働節約的革新が要求され、永続的な資本構成の高度化がもたらされる。かくて労働予備軍が生ずるのであるが、これは賃金のうえにそれを引下げるひじょうに強力な圧力をくわえる。この要因をば強調することにおいてマルクスは強硬でありかつ首尾一貫していた。そして労働組合の活動がそういう圧力の効果にたいして目につくほどにまた永続的に拮抗しうることをかれが予想していたというようなことはもっともありそうにないとおもわれる。」<sup>8)</sup>

つぎに生存費の大きさの問題については、ミークはそれにかんするサウエルの注解にふれたのちにかれじしんの解釈をのべている。すなわち、つぎのとおりである。――

「マルクスの見解では、こういう経済力の冷酷な圧力からの永続的な逃避の可能な手段は事実上ひとつもなかったのであろうか。若干の注解者、たとえばサウエル氏は、マルクスが『生存費』を『自然的欲望』からだけでなく『歴史的發展の産物』である『いわゆる必然的欲望』からもなるものと定義していることのなかにいちるの望みをみいだした。サウエル氏はいう、この定義は、マルクスの見解では『新しい、より高い生活水準がひとたび確立されると、それはまた生存費となって、新しい労働力の価値を表示するのである』ということの意味する、と。実質賃金がこの『生存費』水準にさだまるであろうかまたはその上方のある点にさだまるであろうかということは、サウエル氏のマルクス学説の解釈によれば、労働者と資本家とのあいだの相対的な交渉力に依存する。そこでわれわれはこういう光景を呈示される。すなわち、『慣例的な』賃金の床は多かれ少なかれ着実に上昇しつつあり、その上方で賃金闘争がおこな

われているといった光景である。」<sup>4)</sup>

「なるほど、マルクスは『生存費』をサウエル氏の記述しているような仕方  
で定義した。かれは相対的な交渉力の重要性をかれ以前のたいていの学者より  
も力説した。そしてかれはおそらくこういうことを信じていた。もしも労働者  
たちが賃金水準を十分に長い期間にわたって『最低限』よりも高いところに保  
持することに成功するならば、かれらは『最低限』を構成するところのものに  
かんする社会の観念を変更することに成功するかもしれないということ、マル  
クスの用語でいえば、労働者たちはかれらの労働力の価値を高めることができ  
るかもしれないということ、これである。しかしながら、こういう姿勢をば、  
実質賃金の上昇すなわち純粋に経済的な意味における絶対的窮乏の軽減にかん  
する『マルクスの』法則と事実上いいうるものの地位にまで高めうるとい  
うようなことを、原典中の証拠がじっさいに保証しているであろうか。この題目  
にかんするマルクスの諸叙述は、これを全体としてとらえ文脈をたどってよむ  
と、かれがこうしたルートによる逃避の可能性をきわめてかぎられたものどか  
んがえていたことを暗示してはいないか。ともかくも、たしかなことは、原典  
のなかにはつぎの考え方を正当化するものはひとつもないということである。  
すなわち、マルクスの見解では、『生存費』（労働力の価値）は、労働者たちの  
あいだの一般的に確立している生活水準に——これがたまたまどんなに高くあ  
っても——ひとしいものとみなされなければならないといった考え方が、それ  
である。うたがいのもなく、こういう同等性を要請することは現代のマルクス主  
義者たちにとってはきわめてつごうがよい。なぜなれば、それによって、すべ  
ての商品（労働力をふくめて）の価格はそれを生産するのに必要な労働に依  
存するというマルクスの見解をば、先進資本主義諸国における平均的実質賃金が  
今日その語の通常の意味における『生存費』よりも目につくほど高いという事  
実と調和させることが、かれらに可能となるからである。しかしかれらにつご  
うがよいといっても、このことはイギリスにおける生存費という語の慣用法に  
違反するという代価をはらってのみ購買されるのであり、またマルクス主義の

観点からすればもっとわるいことには、それは『費用』と『剰余』とのあいだの必要かくべからざる境界というものの位置が大部分そのときどきの市場の状況に依存するようになることを意味するという代価をはらってのみ購買されるのである。ある時の労働力の価値はたんに労働者たちがまたまた以前の数年間にわたってかれらの労働力にたいして獲得しつつあったものにすぎないとされるならば、マルクスの賃金理論は事実上まったく無意味なものといえるほど一般的なものになってしまう。」<sup>5)6)</sup>

なおミークは「相対的賃金」の問題にも注意をはらい、「資本主義が発展するにつれて相対的賃金が低下するであろうことをマルクスは予想していた」ということを指摘し、それから最後にマルクスの「資本主義的蓄積の一般的法則の例証」を考慮にいれて、この法則は、「雇用労働者の大多数にとってのひじょうに低い物質的生活水準、すなわちひじょうに低い実質賃金のなかにもあらわれている」という結論に到達している。<sup>7)</sup>しかしかれはその例証における若干の実例の内容からただちにそういう結論をみちびきだしているにすぎないのであって、それにかんれんしてかれじしんがのべている文章は引用しなくてもよいであろう。<sup>8)</sup>

- 1) Murray Wolfson, *A Reappraisal of Marxian Economics*, 1966, p. 94. 堀江忠男訳, 111ページ。
- 2) Ronald L. Meek, Marx's "Doctrine of Increasing Misery". *Economics and Ideology and Other Essays*, 1967, pp. 116, 117.
- 3) *Ibid.*, pp. 117—118.
- 4) *Ibid.*, pp. 118—119.
- 5) *Ibid.*, p. 119.
- 6) こういう叙述につづいてミークはつぎのように書いている。「マルクスは、先進資本主義諸国における平均的労働者が今日かれの労働力の価値よりもそうとう高い実質賃金をえていることをまったくそちよくにみとめて、その理由を説明することにとめたであろうと、わたくしはおもう。」(*Ibid.*, p. 119.)しかし、マルクスによれば、労働者が労働力の価値しかうけとらないということは賃労働制度の法則なのである。だから、この法則を否定するようなことをかれがみとめるはずがない。
- 7) *Ibid.*, pp. 120, 120—122. マルクスの「資本主義的蓄積の一般的法則の例証」にか

んするミークの解釈はかならずしもただしくないのであるが、いまは不問にふしておこう。

- 8) ミークは上記のようにマルクスの「窮乏化説」を内在的に研究したのちに、後段においてそれを方法論的に批判している。かれはいう、マルクスの時代以来先進資本主義諸国においてじっさいにあらわれた諸事実はマルクスの窮乏化説に反するものである。これらの諸事実を否定せず、しかもマルクスの分析の有用性を主張しようとするならば、ただひとつの道がのこされている。『資本論』第1巻でのべられているもろもろの『傾向』や『法則』——『窮乏化』の『傾向』をふくむ——は高い抽象の水準でえられたものであり、それゆえに『それらの有効性は……変容の程度に比例する』ととかれなければならない。(Ibid., p. 123.) そしてミークも窮乏化の傾向が「純粹の資本主義」におけるものであることをみとめるのであるが、しかし窮乏化説は価値論などよりははるかに低い抽象の水準にあり、マルクスじしんも窮乏化の傾向がけつきよく現実の表面にあらわれることを予期していたとかがえる。そこで、かれは、純粹の資本主義には「窮乏化の内的傾向」があるが、現在ではマルクスが考慮しなかったいろいろの原因(帝国主義、技術革新の大きな波とそれによる生産の増大、労働組合主義の発展と労働組合運動の目的の変化、社会主義世界の拡大)の結果によって「相殺され」または「反対に作用される」といった議論に注目する。しかしながら、かれによれば、この議論もつぎのことには困惑するのである。すなわち、「窮乏化」の予言は資本主義から社会主義への移行にかんするマルクスの理論のもっとも重要な要素であるが、この予言のいつわりであることが諸事実によって証明されたということである。(Ibid., pp. 123—125, 126.) これらの批判においてミークはマルクスの窮乏化説にかんするかれじしんの解釈に依拠している。しかしこの解釈そのものが問題である。

## II

ミークの論文のなかから当面の問題にもっともふかい関係をもっているとおもわれる諸文章を引用したが、これらは、前述のように、二つの部分に大別される。すなわち、実質賃金の高さの問題にかんする部分と、「生存費」(労働力の価値)の大きさの問題にかんする部分、これである。以下、この二つの部分におけるかれの議論を検討しよう。

まずその後半からはじめる。あらかじめことわっておくが、「生存費」という用語はさけて、つねに労働力の価値そのものについて語ることにしよう。そういう用語に拘泥するから、ミークは「イギリスにおける生存費という語の慣

用法に違反するという代価をはらって……」といった俗説をとなえることとなるのである。

さて、ミークは労働力の価値の規定にかんするサウエルの叙述を引用しているが、『資本論』第1部第2篇第4章におけるマルクスじしんの定義にしたがってもっとくわしくのべるならば、「労働力の価値は労働力の所有者の維持に必要な生活資料の価値である。」それゆえに、労働力の価値は必要生活資料の範囲に依存するが、必要生活資料の範囲は、労働者の自然的欲望（食物、衣服、娯房、住宅などの欲望）だけでなく、必然的欲望にも依存しており、そして「必然的欲望の範囲は、その充足の仕方とおなじように、それじしんひとつの歴史的産物であり、したがってまた大部分は一国の文化段階に依存するのである。」<sup>1)</sup> これとおなじことがつぎの章句のなかで簡潔にのべられている。「労働力の現実価値は肉体的最低限から背離する。それは気候風土や社会的発展の状態やにおうじて相違する。それは肉体的欲望に依存するばかりでなく、歴史的に発展した社会的欲望——これは第二の自然となる——にも依存する。」<sup>2)</sup>

このように労働力の価値は歴史的な社会的欲望にも依存している。ところで、社会的生産力の発展につれて労働者の社会的欲望が増加し、ますます多面的なものとなることによって、必要生活資料の範囲は拡大するから、そのかぎりにおいて労働力の価値もまた大きくなるであろう。

しかるにミークは「生存費」という語の慣用法に執着して、労働力の価値が歴史的な社会的欲望の増加にともなって大きくなることをみとめない。そして労働力の価値は「労働者たちのあいだの一般的に確立している生活水準」にひとしいとする見解をしりぞけて、「ある時の労働力の価値はたんに労働者たちがたまたま以前の数年間にわたってかれらの労働力にたいして獲得しつつあったものにすぎないとされるならば、マルクスの賃金理論は事実上まったく無意味なものといえるほど一般的なものになってしまう」と論じている。この指摘はある意味においてはたゞしい。労働力の価値が実質賃金を支配すると主張しながら、労働力の価値は「労働者たちが……かれらの労働力にたいして獲得し

つつあったもの」すなわち実質賃金にすぎないというならば、これは一種の循環論法である。しかし、マルクスの見解によれば、労働力の価値は生理的要素のほかは歴史的、社会的要素そのものによって規定されるのである。それはけっして循環論法ではない。

ところで、労働者が労働力の価値しかうけとらないということは賃労働制度の法則なのである。このことは資本家への労働者の社会的従属をしめしている。この「賃金法則は、労働組合のおこなう闘争によっては打破されない。反対に、それはこの闘争によって有効になる。労働組合が提供す対抗手段がなければ、労働者は賃労働制度の法則にしたがってとうぜんうけとるべきものさえうけとることができないであろう。」<sup>3)</sup>「労働組合の活動のおかげで、よく組織された産業部門の労働者は、その雇主に賃売りした自分の労働力の全価値、すくなくともそれにちかいものをうけとることが可能となったのである。」<sup>4)</sup>(しかし「未組織の労働者はなにひとつ有効な対抗手段をもたない。だから、労働者が組織されていない産業部門では賃金はたえず低落する傾向にある。」<sup>5)</sup>)

つぎに、ミークの諸文章の前半、すなわち実質賃金の高さの問題をとりあつかっている部分に目をむけることとしよう。かれによれば、マルクスは「実質賃金の顕著な上昇……がおこるであろうことを予期していなかった」というのであるが、そういう推断の根拠をなしているかれの議論を要約すれば、つぎのとおりである。すなわち、マルクスの見解では、資本構成の高度化によって生ずる「労働予備軍」が「賃金のうえにそれを引下げるひじょうに強力な圧力をくわえる」が、「労働組合の活動がそういう圧力の効果にたいして目につくほどにまた永続的に拮抗しうることをかれが予想していたというようなことはもっともありそうにないとおもわれる」。

しかし、この問題については、『資本論』第1部第7篇「資本の蓄積過程」のなかの、ミークがみのがしている諸文章を考慮にいれて、マルクスの見解を系統的に考察しなければならない。それでまずはじめに産業予備軍としての相対的過剰人口の作用にふれている一文章についてみるに、そこにはこう書いて



ある。「資本主義的生産の大きな美点は、賃労働者を賃労働者としてたえず再生産するばかりでなく、資本の蓄積に比例してつねに賃労働者の相対的過剰人口を生産するということにある。かくして、労働の需要供給の法則が正しい軌道内にたもたれ、賃金の動揺が資本主義的搾取に適合する制限内に拘束され、そして最後に、必要にして欠くことのできない資本家への労働者の社会的従属が保証される。」<sup>6)</sup> これとおなじ意味のことがつぎの文章のなかにもべられている。「相対的過剰人口のたえざる生産は労働の需要供給の法則したがって労賃を資本の増殖欲に対応する軌道内にたもち、経済的諸関係の無言の強制は労働者にたいする資本家の支配を確立する。」<sup>7)</sup>

この最後の引用文のなかでマルクスは「資本の増殖欲」について語っているが、これは剰余労働（剰余価値、利潤）を取得しようとする欲望のことであって、かれによれば、そういう資本の増殖欲がほとんどまたはまったくみだされえなくなるほど労賃が上昇することは相対的過剰人口の生産によってきまげられるというのである。しかしこういった関係の脈絡をマルクスがどのようにかんがえていたかをしめす諸文章は『資本論』のなかに散在しているにすぎない。そこでそれらの諸文章を適当によせあつめ、その文脈にしたがってかれの考え方をたどってゆかなければならない。

さいしよに、資本の増殖欲がまったくみだされえなくなるというばあいについては、マルクスが『資本論』第3部第3篇のなかで資本の絶対的過剰生産に言及している文章が目される。これを引用しておこう。「資本主義的生産の目的は、資本の増殖、すなわち剰余労働の取得であり、剰余価値の、利潤の生産である。だから、労働者人口にくらべて資本が増大しすぎて、この人口の提供する絶対的労働時間も拡張されえず相対的剰余労働時間も拡大されえなくなれば（後者は、労働にたいする需要がつよくて賃金上昇の傾向があるばあいには、もともと拡大されえないであろう）、つまり、増大した資本がその増大するまゝと同量またはより少量の剰余価値しか生産しないばあいには、資本の絶対的過剰生産が生ずるのである。すなわち、増大した資本 $C + \Delta C$ が生産する利潤は

資本 Cが  $\Delta C$  だけ増加するまえに生産した利潤よりも多くなかまたはより少ないであろう。」<sup>8)</sup>

こういう資本の絶対的過剰生産においては、資本が増大しても剰余価値または利潤の量は増加しないだけでなく減少するかもしれないから、資本の増殖欲はまったくみたされえないこととなる。ところで、このように資本の増殖欲がまったくみたされえないのは、「労働者人口にくらべて資本が増大しすぎて」賃金がひじょうに上昇したからにはほかならない。しかしこうした場合は「極端な前提」にもとづいているということに注意しなければならない。<sup>9)</sup>

それはとにかく、さきにすすもう。これからはマルクスの考え方を二つの段階においてあとづけなければならない。すなわち、第1に、労働生産力が不変である（資本構成が不変である）段階、第2に、労働生産力が増大する（資本構成が高度化する）段階、これである。あとの段階では実質賃金の長期的な上昇とその限界にかんする問題があらわれてくる。こんどは『資本論』第1部第7篇のなかから若干の文章を引用する。

まず労働生産力が不変である段階では、マルクスは、このばあい資本が増加すればそれに比例して労働にたいする需要が増加するから、もし資本の蓄積が労働者数の増加を凌駕するならば、労働者にたいする需要はその供給を超過し、したがって労賃は上昇するであろうということ論じているが、<sup>10)</sup> そういう労賃の上昇と資本の増殖欲との関係にかんするかれの考え方はつぎの文章のなかにみいだされる。すなわち、――

「資本の蓄積から生ずる労働価格の上昇はづぎの二つの場合のどれかひとつを内蔵する。

「ある場合には労働価格がひきつづき上昇する。その高騰が蓄積の進展をさまたげないからである。これにはなんの不思議もない。なぜならば、A・スミスのごとく『利潤が低下しても資本は増加する。それは以前よりも急速にすら増加する。……大きな資本は、利潤が小さくても、利潤の大きいばあいの小さな資本よりも概して急速に増加する』……からである。この場合には、不

私労働の減少が資本支配の拡大をさまたげないことはあきらかである。——または、第2の場合には、労働価格の上昇の結果として蓄積がおとろえる。なぜなれば、利得の刺激が鈍くなるからである。蓄積が減少する。だが、蓄積の減少とともにその減少の原因、すなわち資本と搾取されうる労働力との不均衡が消滅する。つまり、資本主義的生産過程の機構は、それが一時的につくり出す諸障害をみずから除去する。労働価格は資本の増殖欲に対応する水準にふたたび下落する。」<sup>11)</sup>

これによってみれば、資本の蓄積によって労働価格がひじょうに上昇し、そのために資本が増大しても利潤量はほとんど増加しないという場合(第2の場合)には、資本の増殖欲はほとんどみだされなれないこととなる。したがって資本の蓄積は減少する。しかしその結果として労働価格は資本の増殖欲に対応する水準にまで下落することとなるのである。ここでは相対的過剰人口が考慮にいれられていないが、その存在ははじめから「労賃を資本の増殖欲に対応する軌道内にたもつ」であろう。そういうわけで労賃が一定の限界をこえて上昇することは排除されるのである。<sup>12)</sup>

つぎに労働生産力が増大する段階では、マルクスは、労賃の上昇と資本の増殖欲との関係をひとつの論題としてくわしく論じてはいないのであるが、しかしそれにかんするかれの考え方はある個所のつぎの文章のなかに暗示されている。「労働の生産力とともに、一定の価値、したがってまたあたえられた大きさの剰余価値を表示する生産物の分量が増加する。……実質労賃が上昇するばあいでも、労働の生産性の増大につれて労働者の低廉化が、つまり剰余価値率の増大が、生ずる。実質労賃は労働の生産性に比例して上昇しない。だから、おなじ可変資本価値が、より多くの労働力を、したがってより多くの労働を運動させる。おなじ不変資本価値が、より多くの生産手段、すなわちより多くの労働手段、労働材料および補助材料となってあらわれる。つまり、より多くの生産物形成者ならびに価値形成者、または労働吸収者を提供する。だから、追加資本の価値が不変ならば、または減少しても、加速的蓄積がおこなわ

れる。再生産の規模が質料的に拡大されるばかりでなく、剰余価値の生産が追加資本の価値よりも急速に増大する。」<sup>13)</sup>

すなわち、このばあいには、労働の生産性が増大するから、実質労賃は上昇することができる。しかし実質労賃が労働生産性に比例して上昇しないならば、剰余価値率は増大する。それゆえに資本の増殖欲はみたされうる。そうしていっそう多くの剰余価値が生産されるならば、資本の蓄積は促進されるであろう。もしも実質労賃が労働生産性に比例する以上に上昇するならば、剰余価値率は低下するであろう。もしかすると、追加資本によって剰余価値がほとんど増加されえないかもしれない。かくて資本の増殖欲はほとんどみたされないこととなる。資本の蓄積はさまたげられるであろう。しかし相対的過剰人口の生産によってそういった実質労賃の上昇は排除されるのである。

これを要するに、マルクスによれば、労働の生産性が増大するときには、実質労賃は長期的に上昇することができる。しかしながら、そのばあいにも、労働者は労働力の価値を規定する基礎となる必要生活資料の範囲だけのものをうけとるにすぎないであろう。<sup>14)</sup> かれは賃労働制度の法則にしたがわなければならないのであって、資本家への社会的従属からのがれるわけにはいかないのである。かくて実質労賃は、たとえ長期的に上昇しようとしても、労働生産性におくれてそれよりも小さい割合でしか上昇することができないであろう。それゆえに、剰余価値率は増大するであろう。<sup>15)</sup> (ここではもっぱら組織労働者のばあいをかんがえているのである。未組織労働者については特別の考察が必要である。)

1) Karl Marx, *Das Kapital*, 1. Bd., Dietz Verlag, 1955, S. 178—179. 長谷部文雄訳 (青木文庫), 第1部, 320ページ。

2) Marx, *Das Kapital*, 3. Bd., S. 914. 邦訳, 第3部, 1210ページ。

3) 『マルクス=エンゲルス選集』(大月書店), 第12巻, 414—415ページ。

4) 同上, 同巻, 420ページ。

5) 同上, 同巻, 417ページ。

6) Marx, *Das Kapital*, 1. Bd., S. 809. 邦訳, 第1部, 1167ページ。

- 7) *Ebenda*, S. 777. 邦訳, 1125ページ。
- 8) Marx, *Das Kapital*, 3. Bd., S. 280. 邦訳, 第3部, 365ページ。
- 9) *Vgl. a. a. O.*, S. 284. 邦訳, 370ページ。
- 10) Marx, *Das Kapital*, 1. Bd., S. 644. 邦訳, 第1部, 953ページ。
- 11) *Ebenda*, S. 651. 邦訳, 962ページ。
- 12) ここでマルクスのつぎのような叙述が注目される。「資本主義的蓄積の本性は、資本関係の恒常的な再生産とたえず拡大される規模でのその再生産を切実におびやかすかもしれないような、あらゆる労働搾取度の減少または労働価格の上昇を排除する。……労働者が現存価値の増殖欲のために存在するのであって、その逆に対象的富が労働者の発展欲のために存在するのではないような生産様式のもとでは、そうあらざるをえない。」(*Ebenda*, S. 653. 邦訳, 964ページ。)
- 13) *Eaenda*, S. 634—935. 邦訳, 939—940ページ。
- 14) しかも不況などのために労働力の価値だけのものの確保さえもおぼつかないことがあるかもしれない。(Vgl., *a. a. O.*, S. 476. 邦訳, 728ページ。)
- 15) マルクスは『資本論』第3部第3篇で利潤率低下の法則を論ずるさいに、まず剰余価値率の不変な場合においてこの法則を数字例で説明したのちに、それが増大する場合についてこの法則をくわしく説明している。(Das Kapital, 3. Bd., S. 238 ff. 邦訳, 第3部, 311ページ以下。) 前の場合には実質労賃は労働生産性に比例して上昇し、後の場合には実質労賃は労働生産性に比例しては上昇しない。マルクスは後の場合を重視しているのである。かれによれば、「剰余価値率の増大と利潤率の低下は労働生産性の増加を資本主義的に表現する特殊の形態にほかならない。」(*Ebenda*, S. 268. 邦訳, 349—350ページ。)

### III

それではマルクスは労働者階級の窮乏化についてどんなにかんがえていたの  
であろうか。『資本論』第1部第7篇第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」  
において、かれは「資本の増加が労働者階級の運命におよぼす影響をとりあつ  
かう」のであるが、そのばあいに資本主義的蓄積過程における労働者階級の境  
遇を特徴づけるそのいくつかの側面について論じているのであって、いわゆる  
窮乏化はこれらの側面のひとつである。だから、マルクスのそういう議論の  
全体にわたってくわしく考察しなければならないわけであるが、その要点は、  
かれが「資本主義的蓄積の絶対的、一般的法則」を記述し、それから相対的剰  
余価値の生産過程における労働者の状態に言及し、最後に結語をのべている、

結論的な文章のなかにしめされている。これを引用しておこう。——

「社会の富、機能している資本、その増加の規模やエネルギーが、したがってまたプロレタリアートの絶対的な大きさとかれらの労働の生産力が、大きくなればなるほど、産業予備軍がますます大きくなる。自由にしうる労働力は、資本の膨張力のばあいとおなじ原因によって発展させられる。つまり、産業予備軍の相対的な大きさは富の諸力といっしょに増大する。ところが、この予備軍が現役労働者軍にくらべて大きくなればなるほど、固定した過剰人口、またはその貧困がその労働苦に反比例する労働者層が、ますます大量的となる。最後に、労働者階級の極貧層と産業予備軍とが大きくなればなるほど、公認の受救貧民層もますます大きくなる。これが資本主義的蓄積の絶対的、一般的法則である。」<sup>1)</sup>

「第4篇で相対的剰余価値の生産を分析したときにみたように、資本主義体制の内部では、労働の社会的生産力を高めるためのすべての方法は個々の労働者の犠牲においておこなわれる。生産の発展のためのすべての手段は生産者の支配と搾取の手段に一変し、労働者を不具にして部分人間となし、かれを機械の付属物に引下げ、かれの労働の苦痛をもってその内容を破壊し、独立の力としての科学が労働過程に合体されるにつれてその過程の精神的な諸力をかれから疎外する。それらの手段はかれの労働する諸条件をゆがめ、労働過程なかれを狭量陰険きわまる専制に服従させ、かれの生活時間を労働時間にしてしまい、かれの妻子を資本のジャガノートの車輪のしたに投げこむのである。ところが、剰余価値を生産するためのすべての方法は同時に蓄積の方法であり、どんな蓄積の拡大も逆にその方法の発展のための手段となる。だから、資本が蓄積されるにつれて、労働者の状態は、かれのうけとる支払がどうあろうと、高かろうと低かろうと、悪化せざるをえないということになる。最後に、相対的過剰人口または産業予備軍をたえず蓄積の規模やエネルギーと均衡させる法則は、ヘファイストスのくさびがプロメテウスを岩に釘づけにしたよりももっとかたく、労働者を資本に釘づけにする。それは資本の蓄積に対応する貧困の蓄

積を必然的にする。だから、一方の極での富の蓄積は、同時に反対の極での、すなわち自分の生産物を資本として生産する階級の側での、貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗野および道徳的墮落の蓄積なのである。」<sup>2)</sup>

この最後のところでマルクスがのべている「貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗野および道徳的墮落の蓄積」という結語はよく引用される有名な文句であるが、そのなかの貧困の蓄積とはなにを意味するかということがここでの問題である。それは一般労働者の実質賃金がますます低下することであると解する解釈があるが、<sup>3)</sup> 既述のように、こういった解釈は誤りである。その結語は資本主義の蓄積の絶対的、一般的法則の帰結としてのべられている。貧困の蓄積とは、主として産業予備軍、「固定した過剰人口、またはその貧困がその労働苦に反比例する労働者層」、「公認の受救貧民層」の増大、つまり労働力の価値をうけとることができない貧困な労働者層の増大をさすのであろう。

そこでこういう見地からできるだけ包括的に問題を考察しなければならないのであるが、ここではこれをしぼって、まず固定した過剰人口についてみることにする。そしてその範囲も相対的過剰人口のもっとも重要な形態である「停滞的過剰人口」にかぎって、これにかんするマルクスの叙述に注目しよう。かれがその特徴をのべている文章を引用するならば、つぎのとおりである。「停滞的過剰人口は現役労働者軍の一部をなすが、しかしその就業はまったく不規則である。かくしてそれは資本にたいして自由にしうる労働力のくめどもつきぬ貯水池を提供する。かれらの生活状態は労働階級の平均的水準以下に低下するのであって、まさしくこのことこそはかれらを資本の独自の諸搾取部門の広大な基礎にする。労働時間の最大限と賃金の最小限がかれらの特徴づける。われわれはすでにかれらの主要姿態を家内労働の項で知った。この過剰人口はたえず大工業と大農業の過剰労働者から、またとくに滅亡しつつある諸産業部門——そこでは手工業経営がマニファクチュア経営に屈服し、後者が機械経営に屈服する——から、補充される。その範囲は、蓄積の規模やエネルギーとともに『人口過剰化』がすすむにつれて拡大する。だが、それは同時

に、労働者階級のなかの自己を再生産し永遠化している一成分をなすのであって、この階級の総体の増加のためには他の諸成分よりも比較的に大きい貢献をする。」<sup>4)5)</sup>

この文章のなかでマルクスは停滞的過剰人口の主要姿態が家内労働の領域に存在することを指摘しているが、第4篇第13章第8節でかれが「近代的家内労働」について論じているところによると、これは「工場、マニファクチュア場または問屋の外業部」のなかにみいだされる。資本は「それが大量的に空間的に集中させて直接に指揮するところの工業労働者、マニファクチュア労働者および手工業者」のほかに「大都市や田舎に散在する家内労働者からなるべつの一軍」を動員するのである。<sup>6)</sup>ところで、そういう家内労働は「もともとまったく不規則であって、その原料や注文については資本家の気まぐれにまったく依存している。このばあい、資本家は建物、機械などの利用をなんら顧慮するにおよばず、労働者じしんの皮膚以外にはなにも危険にさらさない。」そして「家内労働の領域では、いつでも自由にされうる産業予備軍がきわめて組織的に大規模に養成されるのであって、この産業予備軍は、1年のうちのある期間中はきわめて非人間的な労働強制によって10人に1人も殺され、他の期間中は労働の欠乏によってルンペン化されるのである。」<sup>7)</sup>

つぎに公認の受救貧民層に目をむけよう。マルクスが受救貧民層の特徴についてのべている文章によれば、この社会層は「相対的過剰人口の最低の沈澱」であり、つぎの諸範疇からなる。第1は「労働能力者」であって、これは恐慌のときに増加し、景気回復のときに、減少する。第2は「孤児と窮乏児」であって、これは産業予備軍の候補者をなしており、好況期には大量的に現役労働者軍に編入される。第3は「零落者、ルンペン、労働無能力者」であって、これは「分業のために転業できなくなったので零落している人々や、労働者の標準年齢をこえて生きのびている人々や、最後に、産業の犠牲者、……すなわち不具者、病人、寡婦など」である。そして「受救貧民層は現役労働者軍の廃病院であり、産業予備軍の死重である。受救貧民層の生産は相対的過剰人口の生



産のうちにふくまれ、その必然性は相対的過剰人口の必然性のうちにふくまれている。受救貧民層は相対的過剰人口とともに富の資本主義的な生産と発展の実存条件をなしているのである。」<sup>8)</sup>

なお、マルクスは、さいしょにあげておいた結論的な文章の後半において、資本の蓄積にともない相対的剰余価値の生産過程において労働者の状態が悪化することに言及しているのであって、このことについても若干の考察が必要である。第4篇「相対的剰余価値の生産」のなかで、マルクスは、「協業」、「分業とマニファクチュア」、「機械と大工業」という諸題名のもとに、労働生産力をたかめ剰余価値を増大する諸手段とそれらに随伴するさまざまな労働事情について論じているが、ここではとくに大工業制度における機械の資本主義的な充用にとまなう諸事情にかんするかれの諸文章に注意するを要する。それらのうち若干の重要なものを引用しよう。――

「機械が筋力を不用なものにするかぎりでは、機械は、筋力なき労働者、または肉体の発達は未熟だが四肢の柔軟性の大きい労働者を使用するための手段となる。だから、婦人労働と児童労働というのが機械の資本主義的充用の最初の言葉であった。かようにして、労働と労働者のこの有力な代用物は、たちまち、性と年齢との区別なく労働者家族の全成員を資本の直接的支配のもとに編入することによって、賃労働者の数を増加させる手段に転化した。」<sup>9)</sup>

「機械の資本主義的充用は、一方では、労働日の無制限な延長への有力な新動機を生みだし、またこの傾向にたいする抵抗をうちやぶるような仕方でも労働様式そのものや社会的労働体の性格を変革するとすれば、他方では、一部は労働者階級のうち以前は資本の手のとどかなかった層の編入により、一部は機械によって駆逐された労働者の遊離により、資本の命ずる法則にしたがわなければならない過剰労働者人口を生みだす。」<sup>10)</sup>

「機械制度が進歩し、機械労働者という独自の階級の経験がつかれるにつれて、労働の速度、したがってまた強度が自然発生的に増加するということは、自明である。」<sup>11)</sup>

「労働日の短縮が……法律で強制されるようになるやいなや、資本家の手にある機械は、おなじ時間内にいっそう多くの労働を搾りだすための客観的なかつ体系的に充用される手段となる。そうなるのは二つの仕方、すなわち機械の速度の増大と、おなじ労働者によって見はりされる機械またはかれの作業場の範囲の拡大とによってである。機械の構造の改良は、一面では労働者にいっそう大きな圧迫をくわえるために必要であり、他面ではおのずから労働の強化をとまなう。なぜなれば、労働日の制限は資本家を強制して生産費の極度の節減をおこなわせるからである。」<sup>12)</sup>

「工場ではひとつの死んだ機構が労働者たちから独立して実存しており、労働者たちは生きた付属物としてこの機構に合体される。『おなじ機械的過程がたえず反復されるはてしない労働苦のいたましくりかえしは、シシュフォスの苦悩にもひとしい。労働の重荷が、岩石のように、疲れきった労働者のうえにたえず落ちてくる。』〔エンゲルス〕機械労働は神経系統を極度に衰弱させるのであるが、他方では筋肉の多面的運動を抑圧し、またあらゆる自由な肉体的および精神的活動力をうばう。労働の軽減さえも責苦の手段となる。なぜなれば、機械は労働者を労働から解放するのではなく、かれの労働を内容から解放するからである。労働過程であるばかりでなく同時に資本の増殖過程でもあるかぎり、すべての資本主義的生産にとって、労働者が労働条件を使用するのではなく逆に労働条件が労働者を使用するということが共通しているのであるが、しかしこの顛倒是機械をまっしてはじめて技術的に明白な現実性をうるのである。労働手段は、自動装置に転化することによって、労働過程そのもののあいだ、労働者にたいし資本として、生きた労働力を支配し吸収する死んだ労働として、対峙する。生産過程の精神的な諸力が労働から分離するということが、この諸力が労働にたいする資本の権力に転化するということが、……機械を基礎としてうちたてられた大工業において完成される。」<sup>13)14)</sup>

こうした労働事情はすでに労働者の状態がけつしてよくないことをしめしている。ところが、機械の資本主義的な充用の方法は同時に蓄積の方法であり、

そして蓄積の拡大はそういう充用の方法の発展のための手段となる。だから「資本が蓄積されるにつれて、労働者の状態は……悪化せざるをえない」のである。

以上、『資本論』第1巻のなかの諸文章を引用して、資本蓄積過程における産業予備軍の生産、貧困な労働者層の増大と、機械の資本主義的な充用、労働者の状態の悪化にかんするマルクスの諸議論をみてきた。それらは労働者の「疎外された姿態」が発展することをしめしている。<sup>15)</sup> いわゆる窮乏化についていえば、それは貧困な労働者層の増大ということのなかにもっともはっきりとあらわれている。そしてこの貧困な労働者層の増大も労働者の状態の悪化も資本主義的蓄積の本質的傾向にはかならないのである。

ところで、マルクスの見解では、このばあいには決定的なのは、資本主義的生産の本性をあらわすものとしての労働生産力と労働時間との関係である。「資本主義的生産にとっては、生産力の発展は、それが労働者階級の剰余労働時間を増加させるかぎりにおいてのみ重要なのである。物質的生産のための労働時間を総じて減少させるがゆえに重要なのではない。」「社会が獲得する絶対的過剰時間には資本主義的生産は関与しない。」<sup>16)</sup> そういうわけで、機械の充用によって労働生産力が増大するとき、労働日はむしろ延長されるかまたは少なくとも短縮されない。あるいはそれがいくらか短縮されるとしても労働は強化される。いずれにしても、そういう労働節約的生産方法によってかえって相対的過剰人口がうみだされることとなるのである。<sup>17)</sup> そしてこのことは資本主義的生産の独自の制限をしめすものであることに注意しなければならない。すなわち、「資本主義的生産様式にとっては、1日に12時間ないし10時間の就業がもはや必要でなくなれば、すでに労働力は過剰になる。労働者の絶対数を減少させるような、すなわち事実上全国民がいっそう少ない時間でかれらの全生産を完遂することができるようにする、生産力の発展は、革命を招来するであろう。なぜなれば、それは人口の多数をもはや通用しないものにするであろうから。ここにも、資本主義的生産の独自の制限が、そして資本主義的生産はけ

つして生産諸力と富の創造との発展のための絶対的形態ではなくむしろこの発展と特定の点で衝突するにいたるということが、あらわれている。」<sup>18)19)</sup>

しかし資本主義的蓄積の本質的傾向もその実現においては種々の事情によって変容されまたは妨げられる。だから、そういう諸事情の作用を分析し、労働者階級の境遇にたいする影響について考察することが必要である。しかしながらかの本質的傾向そのものはやはり貫徹しているかまたは究極において貫徹する。そしてさいきんの急速な技術進歩とくにオートメーション化にともなう諸問題はこういったかんれんにおいて考慮にいれられなければならない。<sup>20)</sup>

- 1) Marx, *Das Kapital*, 1. Bd., S. 679. 邦訳, 第1部, 996ページ。
- 2) *Ebenda*, S. 680—681. 邦訳, 997—998ページ。
- 3) ウルフソンは資本主義的蓄積の絶対的法則を引用して, かれのそういう解釈をのべているのである。(Cf. Wolfson, *op. cit.*, pp. 94—95. 邦訳, 111ページ。)
- 4) Marx, *a. a. O.*, S. 677—678. 邦訳, 994—995ページ。
- 5) このようにマルクスは停滞の過剰人口の重要な特徴(長い労働時間と低い賃金)をしめしているが, 一般に未組織労働者はおなじような特徴をもっている。この意味において未組織労働者は貧困な労働者層のなかにふくめてかんがえられるであろう。(『マルクス=エンゲルス選集』(大月書店), 第12巻, 417ページ, 参照。)
- 6) Marx, *a. a. O.*, S. 486. 邦訳, 740ページ。
- 7) *Ebenda*, S. 503. 邦訳, 763—764ページ。現代においても中小企業のなかには下請制のもとに家内労働的な特徴をもつものが少なからずみいだされるであろう。
- 8) *Ebenda.*, S. 678—679. 邦訳, 995—996ページ。
- 8) *Ebenda*, S. 413. 邦訳, 643ページ。
- 10) *Ebenda*, S. 428. 邦訳, 661ページ。
- 11) *Ebenda*, S. 429. 邦訳, 663ページ。
- 12) *Ebenda*, S. 432—433. 邦訳, 667ページ。
- 13) *Ebenda*, S. 444. 邦訳, 684—685ページ。
- 14) これらの諸事情のほかに, マルクスが, いわゆる「補償説」の批判において, 機械の採用にもとづく生産力の発展によって可能となる不生産的労働者の増加についてのべている事実も, 注目にあたいする。かれは「大工業の諸領域におけるひじょうに高度な生産力は……労働者階級のますます大きな部分を不生産的に使用することを, かくしてとくに昔の家内奴隷を下男, 下女, 召使などのような『僕婢階級』の名称のもとでますます大量的に再生産することを, えせしめる」とのべたのちに, 1861年のイングランドとウェールズの国勢調査にもとづいてつぎのように論じている。すなわ

ち、総人口 20,066,244人のうち勤労者は 800万人 (このなかには生産、商業、金融などでなんらかの機能をはたしている資本家の全体もふくまれている)であるが、その内訳は

農業労働者	1,088,261人
繊維工場の就業者	642,607人
炭鉱および金属鉱山の就業者	565,835人
金属工場および金属加工場の就業者	396,998人
奴婢階級	1,208,648人

である。かくて「すべての繊維工場における就業者を炭鉱および金属鉱山の就業者数と合計すれば 1,208,442 人となる。前者をすべての金属工場および金属加工場の就業者と合計すれば、総数は 1,039,605 人である。どちらにしても現代の家内奴隷の数より少ない。機械の資本主義的利用の成果のなんとすばらしいことよ。」(Ebenda, S. 469—470. 邦訳, 718—719ページ。)

15) Ebenda, S. 454. 邦訳, 697ページ。

16) Marx, *Das Kapital*, 3. Bd., S. 293. 邦訳, 第3部, 381ページ。

17) マルクスは労働者の過度労働についてこう論じている。労働者階級の就業部分の過度労働がその階級の予備軍を膨張させるが、他方では逆に、予備軍がその競争によって就業者にくわえる圧迫の増加は、就業者をして過度労働と資本の命令への隷属とをよぎなくさせる。「労働者階級の一部の過度労働によって他の部分を強制的怠惰におちいらせること、おそびその逆のことは、個々の資本家の致富手段となり、しかも同時に、社会的蓄積の進行に対応する規模での産業予備軍の生産を促進する。」そしてひきつづいてかれはいう。「この契機が相対的過剰人口の形成においていかに重要であるかは、たとえばイギリスをみればわかる。イギリスにおける労働『節約』のための技術的手段は巨大なものである。それでも、明日、一般的に労働が合理的な程度に制限され、そしてそれが労働者階級の種々の層にたいして年齢と性にしたがってふさわしいように再編成されるとすれば、現存の労働者人口は国民的生産をその今日の規模で継続するにも絶対に不十分であろう。いま『不生産的な』労働者の大多数が『生産的な』労働者に転化されなければならないであろう。」(Marx, *Das Kapital*, 1. Bd., S. 670—671. 邦訳, 第1部, 985—986ページ。)ここでは就業労働者(女子労働者や児童労働者をふくめて)の過度労働が相対的過剰人口の生産を促進するということが論じられているが、このことを論証するために逆の仮想的な例証がもちいられ、合理的な労働の制限と再編成がおこなわれるならば、相対的過剰人口は解消されるであろうということがのべられている。このさいこれらの論述も注目にあたいる。

18) Marx, *Das Kapital*, 3. Bd., S. 293. 邦訳, 第3部, 380—381ページ。

19) この制限のほかに、マルクスが資本主義的生産の制限として明記しているものに、利潤率の低下においてしめされる制限や、社会的生産力の無条件的発展と生産者大衆の収奪や窮乏化(くわしくいえば、労働者たちの諸資力は、労賃の法則によって制限

され、またかれらは資本家階級に有利に使用されうるかぎりにおいてのみ使用されるということによって制限されていること)との矛盾においてしめされる制限がある。

(Vgl. *a. a. O.*, S. 278—279, 287—289, 528. 邦訳, 363, 374—375, 686ページ。)

- 20) ロビンソンは新著のなかでオートメーション化にとまなう諸問題に言及してこうのべている。「産業の機械化はたえず1人1時間あたり産出量を増加させつつある。すなわち産出量一単位を生産するに要する労働の分量を減少させつつある。オートメーションをもってこの過程は大きな飛躍的な前進をとげ、いまや急速度で事務的労働に侵入しつつある。それは産業収入のうち賃金の分前を減少させ利潤の分前を増加させるおそれがある。これまでのところその結果は大して感じられていない。しかしこれは現在の短期的な労働不足のしたにかくれてわれわれにしるのびよっているのかもしれない。利潤からの貯蓄を吸収すべき投資のはけ口をあてるに十分なほど急速に産出量が成長していないときには、利潤分前の向上は有効需要の増大への妨げをなす。したがって、技術的失業が出現する傾向がある。……もっと好ましい改善は……1時間あたり賃金を引上げかつ標準的労働週を短縮するかまたは有給休暇を増加し標準労働年を短縮して、全体の労働者が国民所得の潜在的増加の分前を閑暇という形態でうけとることができるようにするという、および利潤からの余分の貯蓄を課税で吸いあげ社会的サービスに支出するということである。生産力の増大が窮乏の原因になるということは不可避的ではない。」(J. Robinson, *Economics. An Awkward Corner*, 1966, pp. 59—60.) これによってみれば、ロビンソンはオートメーション化にとまなう諸問題は資本主義のもとで解決できるとかながえているのである。これと反対の見解をバナールがのべている。かれは小冊子のなかでつぎのように書いている。「第一に必要なことはオートメーションへの移行が労働力を削減するための口実として使われるということがないことである。そういうことがすでにアメリカ合衆国でおこっている。アメリカには350万から500万の失業者があった。そしてオートメーションの過程ははじまったばかりである。労働組合が賃金の引下げなしに労働時間を40時間以下に短縮することによってオートメーションのバランスをはかることを主張するならばこういう結果をさけることができる。……ここにある危殆は、資本主義のもとでは……そういうことはおこらないということである。オートメーション化への推移がフルにおこなわれるようになる——現在はそれがはじまったばかりである——ときには、いっそうの過剰生産がおこるだろう。貧窮地区がふえるだろうし、新しい失業者群があらわれるだろう。同時に、労働組合とのさげたい摩擦は、完全なオートメーションへの移行をおさえるだろうし、こうしてイギリスを資本主義世界の競争のなかで弱い立場にとりのこすだろう。このことがかえってもろもろの困難を増大するだろうが、そのかわりに、労働者にたいして、これまでにもましてはっきりと社会主義的な解決の必要をしめすであろう。」(J. D. バナール著、藤枝濤子訳『平和の展望』、1960年、160—161ページ。) すなわち、バナールによれば、オートメーション化にとまなう諸問題、ことに新しい失業や貧窮の問題は資本主義のもとでは解決できないのであ

るから、社会主義への移行によって解決することが必要であるというのである。